

## 5章2節4 古典「方丈記・徒然草」

熊本県立第二高等学校

教科：[ 国語 ] / 科目名：[ 古典 ] / [ 2 ] 学年対象・[ 2・3 ] 単位
出題する考査 [ 2 ] 学期[ 中間 ] 考査
該当する单元等 方丈記・徒然草
出題意図 (レベル) 本学年は、日頃から授業において、グループワークを取り入れている。その中で、主体的に相手の話を聞き、適切に自分の意見を述べる活動を図ることはできないかと考え、グループ内での話し合いを再現したEレベルの問いを意識して、作問を行った。 *問一 C、問二・三 I、問四 C、問五 I、問六(1)C (2)C
【一】 次の文章を読んで後の問いに答えよ。  <p>ゆく川の流は絶えずして、しかも、もとの水に<sup>□</sup>あらず。よどみに浮かぶ<sup>㉔</sup>うたかたは、<sup>㉕</sup>かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。たましきの都の内に、棟を並べ、<sup>㉖</sup>藪を争へる、高き、いやしき、人の住まひは、世々を経て尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ぬれば、昔ありし家はまれなり。あるいは<sup>㉗</sup>去年焼けて今年作り。あるいは大家滅びて小家となる。住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕べに生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。</p> <p>知らず、生まれ死ぬる人、いつ方より来たりて、いつ方へか去る。また知らず、仮の宿り、たがためにか心を悩まし、何によりてか目を喜ばしむる。その、あるじとすみかと、無常を争ふさま、<sup>㉘</sup>いはば朝顔の露に異ならず。あるいは露落ちて花残れり。残るといへども朝日に枯れぬ。あるいは花しぼみて露なほ消えず。消えずといへども夕べを待つことなし。(『方丈記』より)</p> <p>問一 <sup>□</sup>について、文法的に説明せよ。  問二 波線部<sup>㉔</sup>「うたかた」、<sup>㉕</sup>「かつ」の本文中での意味を答えよ。  問三 波線部<sup>㉖</sup>「藪」、<sup>㉗</sup>「去年」の本文中での読みを答えよ。  問四 傍線部<sup>㉘</sup>「いはば朝顔の露に異ならず」について、「朝顔」、「露」に例えられているものを、本文中よりそれぞれ一語で抜き出して答えよ。  問五 本作品について、作者名を漢字で書け。  問六 次の文章は『徒然草』（兼好法師）の一部であり、後の会話文は、本文との比較について述べた四人の会話文である。文章を読んで後の問いに答えよ。</p> <p>あだし野の露消ゆるときなく、鳥部山の煙立ち去らでのみ、住み果つるならひならば、いかにものあはれもなからん。世は定めなきこそ、いみじけれ。</p> <p>命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年を暮らすほどだにも、こよなうのどけしや。飽かず、惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世に、醜き姿を待ちえて何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。 (『徒然草』兼好法師 より)</p> <p>Aさん 二つの文章を読むと、『方丈記』も『徒然草』も、( I ) 観が大きな主題であることは間違いないようだ。  Bさん そうだね。この世を( I ) だと捉えることで、名誉や利益等に縛られてこの世に( II ) 心を持つ人々を客観的に見ているよね。  Cさん ただ、よく読んでみると、( I ) 観の捉え方について、二つの文章では、大きな違</p>

<p>いも読み取れると思うよ。</p> <p>Dさん それはどういう点かな？</p> <p>Cさん まず、『方丈記』の文章の、都に関する記述だけど、一見変化しないようにみえるものも、実は（Ⅲ）と主張することで、人々が住まいというものに固執する様子に疑問を呈しているよね。その一方、『徒然草』の文章では、人々が物に固執するさまを述べるというよりむしろ、この世が（Ⅰ）であることを積極的に（Ⅳ）しているようにも読み取れるんじゃないかなあ。</p> <p>Dさん なるほど。以前、『徒然草』で学習したように、この世が（Ⅰ）であるがゆえに、人々はそこに（Ⅴ）を感じることができ、それが生きていく上での深い味わいにつながる、ということだね。</p> <p>（1）空欄Ⅰにあてはまる、最も適当な語句を、『方丈記』の本文中より漢字二字で答えよ。</p> <p>（2）空欄Ⅱ～Ⅴにあてはまる最も適当な語句を、後の語群からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。</p> <p><b>【語群】</b></p> <p>ア 執着    イ 懐疑    ウ 平常    エ 悲壮    オ 変わることはない</p> <p>カ 移り変わっている    キ 変化するはずである    ク 受諾    ケ 肯定    コ 推進</p> <p>サ 流布    シ この世の虚しさ    ス 完璧さへの憧れ    セ 物事の情趣</p>	
採点基準 (配点)	<p><b>【一】</b>（二十点）</p> <p>問一 断定の助動詞「なり」の連用形    2点</p> <p>問二④ 水の泡    1点                      ㉞ 一方では    1点</p> <p>問三③ いらか    1点                      ㉟ こぞ            1点</p> <p>問四 朝顔 すみか    2点                      露 あるじ        2点</p> <p>問五 鴨長明        1点</p> <p>問六 (1) 無常    1点</p> <p>          (2) Ⅱ ア 2点    Ⅲ カ 2点    Ⅳ ケ 2点    Ⅴ セ 2点</p>
外部からの視点	<p>* 問六(1)は、主題がどこからきて、今の我々とどう関係（影響）しているのかという観点を加えるとEになるのではないのでしょうか。</p> <p>* 職員アンケートのコメントです。 採点の客観性について、Eレベルの出題を考えようとするとなりに難しく感じてしまう。時間に制約がある中で、実務的にはどのようにしたら克服できるのか。 →Eレベルの出題を採点するには、ルーブリックが必要ですよということです。時間の制約を考慮すると、汎用性が高いものを作っていくとよいといえます。汎用性が高いと抽象的になりわかりにくい印象があるかもしれませんが、複数回使っていくうちに生徒もわかってきます。</p> <p>* 「ただ、まず、なるほど」などのような逆説がないと、対立する意見ができません。</p> <p>* 質問によって質が高まることがわかることが大切です。</p> <p>* 「どう世界観が違うのか。2つのどこを見てそういえるのか。根拠はどこになるのか。」そういう情報の取り出し、解釈をどうするのか、どう正当化し、エビデンスを読み取るのかが必要です。次に何らかの仮説を立てられる力につながります。</p>